

胡麻かすつもりでなく、八千代は自然と女房らしいところへのみ気づく。

「うむ……なか／＼工風してあるねえ、うちの流しの臺も、何、わけはないよ、足をつけて高くして上げやうねえ、早速」

「そすと、よく乾いて隧分氣持よくなりますわ……」

草二は家の中の大抵の事には大工の眞似が出来た。

湯のぬくもりは、腹の底から二人のぎこち無さを洗ひ落してくれて居た。

併し、八千代は女中を下げた差し向ひで、飲めない口に草二が杯を持つていつたりしても、氣分はやつぱり夫婦といった型を、既に破る事の出来なくなつて居る二人だことが解つて、一寸寂しさに似たものが感じられないでもなかつた。

彼女は、歸りたいとせがむ自分を歸しともがらない彼が、とう／＼タキシードで運んで来てしまつた、かうなる前の或る夜の光景が忍ばれた。

その夜の大川に映つて、ゆら／＼と揺れてゐた澤山の灯の彩も忘れ難ひ思ひ出だつた。

草二も、もう昔といつていゝ、そのころの事を需めて居るのでもなかつた。少なくとも彼

女に對しては、そうした情緒を需めることをしない彼になつて居た。が二人は、目先きの變つてるのに、一寸氣分が軽くなつて居る事をお互に救はれたやうな感じで、嬉しく見合つて居た。

「進さん！ 心配してないかしら？」

取り立てゝ話すことのない所在無さが、彼女にお座なりでなく、家に居る進の事を思はせた。

「驚ろいて居るだらう……。随分……家なんて明けた事が無いからねえ」

「だから、歸るとよかつたのに……あの時！」

「一人で歸さうとしたんぢやないか……Mになんて電話を掛られたりすると、いゝ氣持がしないからねえ」

「ウフ……誰が！ でも、何となくあの時あなたが随分こはかつたんですもの」

「僕が買ひたいつて云ふのにホーゼは買はないし、千疋屋ではあの通りだし」

八千代は黙つて笑つて聞いて居た。只心の中で——何んていぢらしい心配をしたもんだ

らう……この私が！と思ふと頬笑まれた。

今になつてから變にぐれ出して、此處へ來てしまつた事も別段悔いられもなかつた。只、今夜の二人の心を思ふと、全てが頬笑みたかつた。

「僕も女で、こんなはらく心配させられたことは無いねえ、この女と逢ふまでは！」

でも、八千代はやつぱり笑つて黙つた切りだつた。この時彼女の氣持の上を、秋の水の様なら寂しさが、取りかへしのつかない程のはかない尾を引いて過ぎて行つた。

——眞面目にお互ひをのみ掘り下げての生活をしながら、張りつめた氣持にお互ひの藝術に精進する約束の二人ではなかつたか！八千代はさう思ふと、神聖な藝術奉仕の生活をすつかり臺なしに濁してしまつた様に感じて、今の二人がひどく悔いられるのだつた。

泊らないままで、此處を出てしまひたい子供じみた位の氣のつめ方もされる。

併し八千代は心持酔うて來たらしい草二には、そんな氣持はおくびにも告げなかつた。

告げないままで自分の氣持を代へて行かふとつとめた。

「をかしいのねえ、毎日顔を突き合はせて居る二人がこんな處に休むのは！」

「いゝさ、時たまには」

頭の上に五燭光の電燈がほつきとついて居た。それを仰向きに眺めながら八千代は朗かな聲を小さくして笑つた。

「あなたに、お氣の毒な様な氣がしますわ……」

「もう……そんな氣はないよ、そんな僕でもないよ」

「でも……」

「でも、どうしたの」

八千代には、草二の顔が兄と居る様な氣がされた。

「やつぱり、お氣の毒のやうよ」

「馬鹿だねえ」

「そ！」

「そ！ つてをかしい人だねえ、この人は！」

八千代はまた聲を殺して笑った。

「ねえ、二人が兄弟のやうに思へるんですもの……妹だから、私お氣の毒なんですわ」  
それで草二も、一寸言葉にいひ表はせない程の柔かい愛で……八千代をいとほしくなつた。

翌朝、簾の子で窓のおほはれた小ぐらさの中に遅く二人は目を覺した。

昨夜のことが遠いことに考へられる。

外はかん／＼と、陽が照つて居た。綺麗に打ち水された小路を行く時草二は、ゆうべのままの少し皺のいつたなりの八千代の浴衣姿に、そつと隠れた笑みを投げてよこした。彼女もそこで、共犯者の親しい笑みを返した。

——仕様のない二人！二人ともさういつた眩きを、めい／＼の腹の中で眩いた。

彼等は×屋に入つて軽い食事と冷たい西瓜すいかを取ると、××坂を下りて行つた。

向ふから朝の元氣のまだ残つた澤山の人が登つて来る。帽子のない草二と、バラソルを

持たない八千代とは、あたりのシヨウウィンドを見るときもなく眺めやりながら、急ぐでもなくふらん／＼と歩いて行つた。

さすが、一人を残して一晩ひとばんのうちに世の中が、随分手の届かない遠さに流れていつて了つて居るといつた除けものゝ寂しさが感じられる。

「やあ……」

「どこへ……」

「一寸××社迄！」

行き過ぎた人を草二は、

「あれは詩人の○○だよ」

と、教へた。

八千代は背の小さいその人を、詩人にしては昨夜押しゝたであらうズボンの押目の、あんまりハッキリし過ぎ、又額も、髪も磨き過ぎると思つた。

そして、さう思つた自分をひどくをかしかつた。

「家へ歸つたら、お仕事しませうねえ」

しかし、少し行つた彼女は、さう云へば何となくホッ！とする様な氣がして、草二に  
囁やかすには居られなかつた。急に雨雲のやうに、心に擴り出した自身の憂鬱に向つてい  
つてるのだ事を、よくわかつて居ながら。

(完)

——大正十五年五月作——

## 跋 一

### 兩性愛の二面性について

もの事に楯の両面がある如く、愛が女に作用するものにも、強弱の両面がある。

女は弱く、母はつよしと。對照を子供へのことに限らず、一度愛し切ることを知覺して了つた女性に、もし男が愛を求め、必死に命じて於て、その女が愛の弱さの中に征服されると緒に、母性を女心の中に立ち上らせる強さを、良人として受ける自分の成長の母役と、子供への……愛する母の心を……窮極するところ、「培ひの心」を、活かし出し尊重することを拒否ならば、女性は絶望し、女自身の生命を、内面的土台から打ち破られるか「愛の光り」を、女自身の生命に結びつけ創造できぬ不幸さに、そこを離れて行くしかないであらう。女を、男の性と愉樂からのみ求め、そこに壁を設け限る男に、災ひあれである。兩性間に愛を破片にし、こぼむものは、愛の完さの前に、初めより、片隣をしか希望ぬ愛は、呪はれてあらねばならぬ、完き愛の前には！ 惑はしの愛に、「愛」とは、よしや傷いても、たぢろく質のものではないことを、己れの一部をなりと落し、失するものではないことを、辨へ貫はねばならぬと思ふ。一度、眞の愛を課し、得、與へ合つた「愛」こそは、他から吹く風で如何ともなるといふことではないのだ。地上の愛を、多分に支配する力を

與へられてゐる「男性」は愛の生かさせに、間違つた支配の力をふるつてはいけないことを、それは、自身こそ、それなり損ね減す……道と、術であることを、納得して貰へたらと思ふ。

子を持たぬ男は、女の中に（子のなき場合は相照たる良人に對してでも）女性が、女性の中に、「母性」の命じと營みを創め、積んで行く「培ひ」の、「母の強さ」が働いて、家を、良人を生かすべく、深い眼のとゞけから、その愛の到達への心に向けて、強氣を生かし出すことを、理解し、うけがつてやるのが缺け勝ちなのである。

愛の大半を占めるものは、子に對する愛であるといふ。男が打ち向ふ女性自身の成長の中に、一人の子の心を見出で、女の中には母の心を、それぞれから、ゆるしと培ひに結び付け、生かしてゆけたら、兩性の愛は、一つの、役を役に、肩がはりさせつゝ、生かし抜けるのではあるまいか。

世には、潛流するいろいろの社會的制度的手薄さからして引いてくるもので、母達の肩にのみ懸られ放してゐる……不幸な「事象」も大ひにある……。母性の嘆きと悲しみは、その訴へを集めてその天職への不利と不備に對して、一つの手段のしつらへを、何日か成されねば、愛の結果のした、しかも現實的に母性の役に繋がる片手落ちは、妻の肩にのみ過重に懸られて充たされ得ぬといふ境に立つ。が故にこの過渡期の不幸の心と現象を繕ひ繋ぐ爲の、母達、女達の願ひは、きゝ届けられなければならぬものであらう。生命そのものに立つての見地からして。正しき責任と義務に服す

ることこそは愛と滋悲の變形であることを。そこから創れ出る悲痛さとゆるしの、そして限度さの、人命に及ぼす内面性への、量と深さを、測量し、制度を人格で補ふ態の「愛の行爲の肯定」が、「愛」そのものゝ質を透して品位づけられるのでなければ、そしてこの事に對する解決はのぞめないし、次にくるものに對しても申譯なきことではないのか……と、力の不資格が、省みされることである。

## 跋 二

### 女鏡に秘したるものから！ して愛を臨むとき

苦惱を極めた時代を、勇躍をした人格の維新の「士」達に、次の時代の後繼者として、息のかゝつた教育と仕上げをされた私の父達の以後の分けて都會人が、その角度と文化性から、歐米文化の移入に俱ふ……不消化を、それなり身に引き心に着けてゐる、爲に學を尊び、智の眼覺めを欲した一人の女性の、女の營みに連れての同伴者指導者として、その個性はさて置いて、宇宙的自然主義への大根への男自らが調節を缺き、人爲的限られた自然主義の練磨に自らの人格性に疑惑の傷をば付け、又は、日本の血を身内に引いてることを忘れて、マルクスの借りマントに生活を装はへてで、その生活をそのワクに片よせては、めて人間性をズタ／＼に引きちぎつて見たり、文化へのよぢりの肥料に資を得むとして、利用すべからざる……愛を巧利な道に採つて、婦女子に押しつけた分擔を、面を拭つてそ知らぬ氣に使ひ了したり、ゲーテへの道を、概念から採り容れて、育ちと、飛び付いた權力との、身にそぐはなさのする「淵」を指しての轉落に、實行のともなはぬ……苦しい時の神だのみ式を徒らに成したり、「男」としての人間性の調節といふ、一點の觀方からしての前には、あまりにその手前にゐる人達許りの、した……不結果が、それなり生活の同伴者の肩に懸り、心に

悶えの闇と、死に等適する類ひの沈黙を強いるしかない結果を來したことは、も早や瞳を留めて見ていゝ時期ではないかと思意される。

この、過渡期の……文化文明の消化に、「士」の道を、時代に適して、こなし得るまでの男の過程に連れて、「愛」といふものを透してした女達の生活と心に流した血も又、生やさしいものではなかつたと私は氣付く。

かゝる中の一人として、かゝる環境で、思想の未熟な風になぶられ惱み乍ら、時代の影響下の人格のでこぼこと、生活疑惑のする惨めな幻想の投げ掛けと、靈の戸迷ひの涯に共に立たされあやめられ乍らも、その下をくゞつて、そのいづれにも沈黙を、大事な小さい生命の成長の培ひの爲に守つて、女性面を据え、身乍らに揺れに揺れ、怖れに怖れる男達の心々を、「愛」で、支へ乍ら、どうやらその、どれもに命の足を取られもせず、大役の投棄も成さずに済んで、私は、私の呼吸の能る空氣の採り上げの領域まで、どうやら生き了へて今日に到つた。女の天職の斯くも根づよく、この長い、暗ひ、嵐に、私の生命をつなぎ留め、生かさして呉れたことを、私はどんなに嬉しく、有難く思つてゐるか。

過渡期の男達が、かゝる下での「男」としての土台への未完成さの故に……數ならぬ父の行跡に見たものを一筋に信じて崩さずに男への尊敬と期待を、汚し捨て兼ねて禮を盡し生かさふとなす女

心！ から引いて私のあくなく、成佛しようさなした「女役」の不撓さ！ まことに未完成といふ男の人格の缺如さの心なさで、私の上に投げ掛け、こすりつけた了した諸行の傷！ そしてその罪の痕跡は、それなり私の半生をいろどる變遷の……生涯の外訓なす地圖を描き、内に、私の沈黙となつて、墨のような、暗い、「愛故の耐え」に不問にさせて来た。

が、私の中の、秘めた女鏡を展ひたならば、一切の眞實は其處此處と、採り上げられねばならぬ。この、文化の、よちりの道で……男と女の……生活と心のなひ、あひで落した破鏡のあとが、轉々とこぼれた血をひいて映され、しみを着けてゐるのであらう。

そこには、高い、支導者といへども、時代性の迷妄にぬきん出て、さうした「力」を得て、どう個人として、でき得るといつた！ もの……生き就くには、あまりに重く大き過ぎた、重壓下の事柄と筋目があつたのだと思ふ。

私への、その扱ひ方を別としたら、あながち、私の相手達許りのした……罪過とのみ言はれも見られもされない事なのであらうと思ふ。さうして、此處での、在り方の正しい展望を把持するものは、私の相手の誰にも、養はせもせず、養つて貰ひも、依存もしなかつたところの……私の娘の、將來性に立つ、内なる傍觀者としての「女と心」でこそあらう。

母の耐へた心を占めたものを、又、彼らの、大人氣なしにした……愛と生活の支配者としての、

その力の、生活にも心にも、母の前に俱ともへてなかつた……あずらゐて、それで、なしたこと、言つたこと、行つたことの數々が、その愛の始末の遣り方と緒に、各時代をつゞる人達として、その在り方が、いかに無心なものに映つたか……。それは……なかなか重大な、見落してはならぬものであり、これからの女性の「役」と「道」にとつて、兩性問題が、正しい日本の「土」の躰からだと血と、その環境に立つての大根に還元し、樹立をなす迄には、不幸な母の「心と生活の跡」を、彼女のため、採り上げること、一つの正しい未來への、示唆と成り得るものを、得れるのではないかと思ふ。

この事の、餘りに大きな問題と人生展開の展望の前に立つて、彼女は十九の身空で、自らの、身のすゝめ方に、當惑してすらゐるやうである。

其處にこそそして、私が、私にかぶせた男達をゆすぶつた時代性を防ぎもならず懸けた……彼女……次の代へ向けての重壓であり、それら皆を取り退けて始末してやらねばならぬ、責任が在ること、あらねばならぬ筋合ひの存することと思ふ。

そのためにはそして、私！ のような、母達は、父達は、もつともつと自由主義時代の人物として、身につけた悪い癖と迷つた心からの立ち上りに立つて、澤山のくの涙に、悔ひをし、涙を流してこれから来る人達の爲に、自分の落した、しみを引き繼がせぬよう、こゝで淨ひ潔め、清算し、消化し始末せねばならぬことなのではないかと思ひ、私は瞑目して、獨りでもそれをなす所存

# 納本



昭和十四年五月五日印刷  
昭和十四年五月八日發行

【定價金貳圓貳拾錢】

東京市芝區新橋七ノ十二  
 著 作 山 田 順 子  
 發 行 者 山 田 淑 子  
 東京市神田區東福田町三  
 印 刷 人 濱 田 精 彦

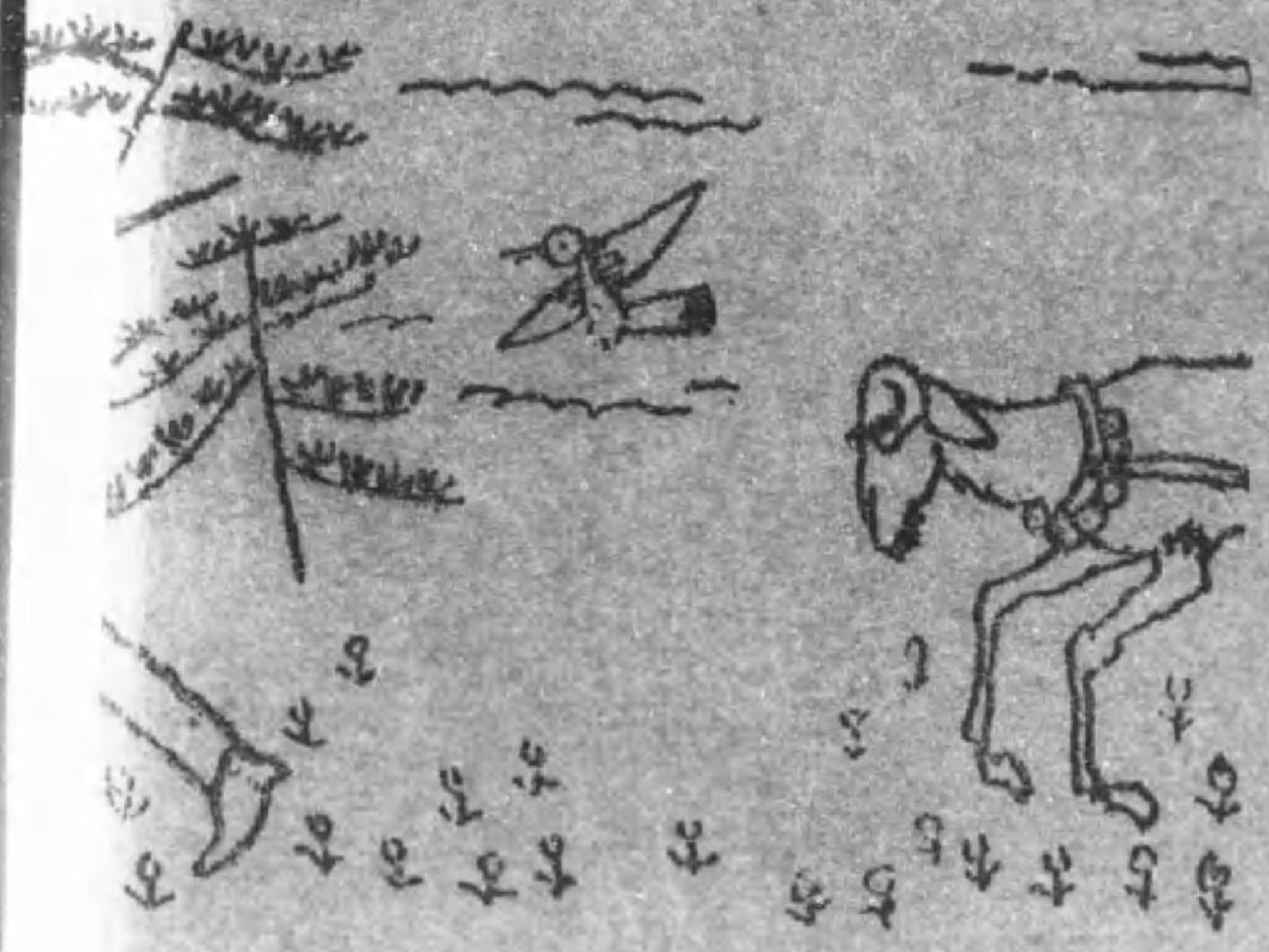
發 行 所 紫 書 房  
 東京市芝區新橋七ノ十二

でゐるのである。そしてこの道に際して、私のような立場を男で分つ、心正しい處行の人を見出したい……相も變らぬ願ひとそれのならない……心寂しさも一方で感じてゐぬことはないのである。

——をはり——



389  
319



此  
山  
書  
房

終

